

(2) 学習活動から家庭への支援へと広がった事例

生徒Bは、現在中学部2年生で、課題はいろいろな人とのかかわりの楽しさを感じることができるようになることであった。24年度のAT相談では、この課題をもとに、学校で取り組んできたスーパーカーをうまく押することができる様子を母親に見てもらうことができた。

相談の中で、「うまく押せているスイッチ操作が、いろいろな活動につながってけるとよい」との母親の願いをもとに、アイデアを出し合ったところ、「家で部屋の灯のON・OFFができるとおばあちゃんが喜んでくれるであろう。」と母親から提案があった。そこでスイッチとリモコンを用意し、学校での支援を家庭での活動につなげていくことになった。

そのために以下の二つのことを考えた。

一つ目は、家庭への広がりについてである。今までは、学校の活動を中心としたAT支援であったが、学校と家庭をつなげるために、保護者に「こんなことができる」「家でもこんなふうに活躍できる」ということを、わかりやすく伝えていくことが必要だと感じた。つまり、ATによる支援を学校の活動だけでなく家庭や学校外の活動にもつなげていくことで、子どもの生活に広がりがあり、生きる力をつけていくことになると考えた。

二つ目は、学校の機器の貸出についてである。今までは、貸出体制が整っていなかったが、これを機会に、学習を生活の中で定着させるために機器を貸し出すことが必要だという観点から検討することになった。台数に限りがあるため、AT相談の中で、期間を設定して、計画的に貸出できるようにした。

また、今回の事例では、日常生活用具給付制度等の市町村が行う地域生活支援事業の利用等についても情報提供することで、家庭でも購入し、より積極的に使うようになった。さらに、リモコンの改造については、福祉用具専門施設に依頼した(図3)。校内だけに相談をとどめるのではなく、地域の機関とも連携することで、卒業後を見据えた継続的な支援につなげていく必要性を感じた。



図3 改造したリモコン

現在授業の中ではスーパーカーを使った朝の会での司会と、日常生活の指導において簡単な二者選択に取り組んでいる。その後リモコンでの灯のON・OFFはあまり興味がなくなってきたようだが、購入したVOCAに連絡帳代わりに担任のメッセージを吹き込んで持ち帰らせたところ、自分が伝えたいメッセージだけはボタンを何度も押して再生するなど、使い方を理解してコミュニケーションを楽しんでおり、家庭への広がりが見られた。

※ 本事例(特別支援教育教材ポータルサイト掲載事例)は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「B-292 特別支援学校(肢体不自由)のAT・ICT活用の促進に関する研究一小・中学校等への支援を目指して一」(平成26年3月)、53-54に記載された内容である。